

# 京まなびミーティング<sup>みやこ</sup>②6



～古典の祭典 2019～

「能楽へのいざない～片山九郎右衛門が語る能の世界～」

京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業などを行う「京まなびミーティング」。

第26回目となる今回は、片山九郎右衛門委員が、古典の日記念事業「古典の祭典2019」とタイアップして、「能楽へのいざない～片山九郎右衛門が語る能の世界～」というテーマで講演をされました。普段なかなか触れることのできない能について、その魅力を、実演を交えてわかりやすくお話いただきました。

日時：令和元年11月1日（金） 14時30分～16時  
場所：京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）  
講師：片山九郎右衛門<sup>かたやまくろうえもん</sup> 委員（観世流能楽師）

講演は、[京まなびネット](#)  
「動画で学ぶ」コーナー  
で視聴できるよ。



## 古典の日記念事業「古典の祭典 2019」

11月1日の「古典の日」を中心に、記念講演・伝統芸能の公演など多彩な事業により、気軽に古典に親しんでいただけるよう「古典の祭典」が京都アスニーで毎年開催されています。

能楽観世流シテ方 片山九郎右衛門でございます。

千 玄室大宗匠をはじめ、たくさんの方がいらっしゃって圧倒されていますが、どうぞよろしくお願ひいたします。



今日は『敦盛』<sup>あつもり</sup>というのを中心にご覧いただこうと思っておりますけれども、15分ほど前説をさせていただきます。

能というのは、今日お集まりの皆さん方は、多分社会科とか国語の教科書に出てきたことをご存じかもしれません。教科書等では世阿弥・観阿弥<sup>せあみ かんあみ</sup>という親子が室町時代の前半に、丁度今から650年ぐらい前に能<sup>能</sup>というのを大成したんだ、と非常に断定的に説明をされていると思います。ですが、能<sup>能</sup>というのは650年前、室町時代にほんっと現れたわけではありません。室町時代までのいろんな芸能の良さを吸収しつつ、発展させたり、もしくはカットされたりしたものが混じっていると思います。

650年前に世阿弥・観阿弥<sup>せあみ かんあみ</sup>という親子が「複式夢幻能<sup>ふくしきむげん</sup>」を始めました。例えば一番よくありがちなのが、ワキのお坊さんが、ゆかりの地に足を運ぶ。そうすると里の者がやってきて、その土地の出来事、例えば源平の合戦の有様を語り、最後に「実は自分が（その霊である）…」と言いおいて前半が終わる。後半はお坊さんの夢枕の中で、自分の在りし日の出来事、成してきたことの罪、人間ですから生きているといろんなことが罪になります。そのことを懺悔の気持ちでお坊さんに物語っていく中で、一つ慰めを得て、帰って行く。このようなスタイルができ上がったのが世阿弥・観阿弥の功績だと思っただけなら一番、わかりやすいと思います。

### ●演目『敦盛』について

さて、今日の『敦盛』ですが、『平家物語』は皆さんよく御存じかと思いますが、その中で『敦盛の最期』というのがあります。一ノ谷の戦いの中で多くの平家の武将が討たれ、その後の屋島・壇ノ浦で、平家は日本史上、類を見ないような、一門としての最期を遂げてしまうわけです。こんな戦いはなかなか国内では他には無いと思いますが、そういう最期を迎えてしまう。平家が栄えた約20年間、象徴するかの出来事が幾つかありますが、その一つに、「無官大夫の敦盛が16歳で初陣し、そして討たれていく」というシーンを能にしたものがあります。敦盛は笛の名手であったとされまして、上皇から敦盛のおじいさんにあたる忠盛に預け下された笛

を大事に持って戦場に行ったとされています。敦盛は平家の一門同様、一ノ谷の戦から逃れて四国に渡る船に乗ろうとする時に、熊谷次郎直実くまがいのしろうなおさねという人の「敵に後ろを見せるのは卑怯なり」という言葉に振り向いて、結局、討たれてしまうという最期を迎えます。

この能の中では、珍しくワキのお坊さんが名のある人です。熊谷次郎直実くまがいのしろうなおさねが出家をし、蓮生法師れんせいほうしという名前になって、今一度、在りし日の戦をした一ノ谷に赴き、敦盛の霊を慰めようと思い立って、野を越え、山を越えやって来る。そこで草刈りの男たちに出会った中に敦盛がいた、敦盛の霊がいたんだということが前半の設定です。

前半と後半の中ほどに「間狂言あいきょうげん」というのがあり、これは狂言の役者がワキの見聞きしたこととはちょっと違う角度で、自分たちが伝え聞いている歴史を物語るという場面があります。それにより一層、日、時間の流れというものははっきりわかっていただく。狂言は室町の口語体ですので、文語体の能の文章よりもわかりやすいです。間狂言でかみ砕いた話を聞いていただきます。

敦盛の人となりとと熊谷次郎直実という人が討ったんだということを聞き、里の者が「本当にひどいことをする」と思って受け入れている。それを蓮生法師がじーっと聞いているというシーンが印象的にあります。「熊谷次郎直実がやってきたら里の者皆で討ち殺してくれる」ということを言われた時に、蓮生法師が「(熊谷次郎直実というの) 実まことは私でございます」と告げる。

そういう話が中ほどにあり、後半は敦盛の霊が熊谷次郎直実の夢枕元ゆきまくらもとに立って、平家の合戦で、熊谷次郎直実が見聞きしていない部分も含めて物語るということです。

須磨寺という所に行きますと、遺跡と言うか、お話が濃厚に残っています。そこで私達が一番びっくりするのは、須磨寺に「青葉の笛」という笛が敦盛の所蔵の品として展示されているのですが、これは、いわば偽物です。「青葉の笛」というのは存在せず、能の中で「青葉の笛と思ってください」というセリフがあります。実際には「蟬折せみおれ」とか「小枝こえだ」とかいう笛の名前が伝承されているのですが、それがいつしか能の言葉の中の「青葉の笛」というのが笛の名前になって、実体として出てくることがある意味、能に携わる私達は喜ばないといけないのかもしれないと思います。

物語の中の世界をご覧になる方、やる者が等しく、

「その日一日」、「その日ある出来事」として居合わせていただくことで、「人の想い」が時空を超えてやってくる。それが、何かを問いかけて、トークングするということが芝居の本義であるとする、能は一番それを大事にしています。

物語を信じてもらえれば信じてもらうほど、何か形を帯びないものが形を帯びて、自分の心の中にでき上がっていく。能はそういうふうな構造になっていると思ってください。

今日は二部で、フルセットで囃子方はやしかた、地謡じうたい、ワキを整えてやるわけにはいきませんが、思い浮かべてください。能舞台の中には地謡という8人の語り部で、斉唱のように、歌と語りの間のような表現で1曲のストーリーを紡いでいきます。

ワキというのにはある意味、お客様が一番近い存在かもしれません。「聞き手」、「慰め役」です。シテは何の為にために出てくるか。何百年もおの澱のように溜まった自分の想いを聞いて欲しくてやってくる。亡者というの、何かを聞いてもらうことで慰められて、また次の100年、眠りにつける。そういうものが次々とタイムパラドックスのようにやってくるというのが芝居であり、能であります。

ワキのお坊さんは「なぜ、どうして」ということを舞台の上で皆様方の代わりに聞いていると思っていただいたて。ワキというの「ワキ座」といって、舞台右端にだいたい居る位置が決まっています。背中うしろの後ろに背負っている柱まで「ワキ柱」という名前があり、あまり動かないんです。それだけじーっと「視座」というか、見る場所というか、そこから全体を俯瞰して、聞いて、そして慰めてやるという視点で皆様も入っていただくと一番、舞台に参加していただきやすいと思います。

芝居というの、能も含めて、「見ていただく、理解していただく」というよりは「参加していただく」一種のお祭りなんだと思っていただければありがたいです。

もう一つついでに言いますと、そもそもなぜ、敦盛が持っていた笛のように、そういう大事な楽器が宮中から預けられていったか。そういったことは他にもあり、曲目の中の『経政』ですと、琵琶の名手だった人に預けられました。これは宮中にちのりやく傅役という制度があったらしいのですが、当時は今のように正倉院も発達せず、美術館や博物館も無い時代なので、大事な楽器が戦禍に巻き込まれることをすごく心配していました。そこで、使いながら守っていく傅役という制度ができた。その

中で敦盛や経政が居たんだということを知っていただけでありがたいです。

二部の説明を少ししますと、シテの分林道治が平敦盛の霊です。地謡を私、片山九郎右衛門と橋本忠樹が務めさせていただいています。『敦盛』の後半部分、義経がまさに「鶴越の逆落し」で平家を攻め落とそうとして待っている。その時にちょうど平家一門はこれが最後になるかもしれないという思いを込めて酒宴を開くのです。その時の笛を務めている敦盛の気持ちから語られる戦の様子を、ワキのお坊さん、熊谷次郎直実(蓮生法師)に見せている。これから、15分ほどお付き合いいただきたいと思います。

(実演)



ありがとうございました。どういふことをやっていたかという、能の場合、本曲、フルセットですと、勿論「前シテ」、「間狂言」があります。その後の場面、蓮生法師が念仏を唱えて夢うつつの中に落ち込んでいく時に、後シテ登場の音楽、囃子、「一声」と言うのですが、それで導かれて戦装束に身を包んだ先ほどの敦盛が出てきます。そして「淡路湯…」と謡い出し、「そもそもなぜ自分はここに漂っているかと思うと、一番思いを濃くした土地というものに自分は離れられずに居

る。あなたのお弔いのおかげですいぶん慰められたが、とはいうもののやっぱり命のやりとりをした相手だから、なかなかの事では無い、恨みを消し去ることはできない。もう一声、成仏させてもらうために、自分も懺悔の話をするから弔ってほしい」とうんぬんかんぬんあり、そして、今、先ほどのシテが歌いながら出てきました。

在りし日の、滅びる前、前日の城の中の様子から謡い始めて、中ほどのクライマックスで笛の舞が始まります。それは在りし日の自分達、一門の最後の終焉のありさまを現すと共に、源氏方がなだれ込んで来て、皆、散り散りになっていく様子を後半でなんとなく感じられるような舞の構成になっています。

本来の舞は少し意味が違い、私達がやっている舞というのは、それ自体はあまり意味が無いものが多いですね。日常の動作、そして笛の表情も結局、感動的と言いつつ全部で何かを具体的に表現するのではなく、感動の波みみたいな波長を作っていく。その中にお客様が、舞の始まる前と終わった後で、この間に挟まる想いを、広げていただいている。そういう時間を「舞に委ねてください。シテの動きに委ねてください。」という時間だと思っていただくことが説明として過もなく不足もなくだと思ひます。

### ●能のジャンル

能のジャンルは、後に分けたものですが、大別して5つ「初番」、「二番」、「三番」、「四番」、「五番」。これは江戸時代には決まっていた。セレモニーのような、1日のプログラムとしてやる時、最初に「能にして、能にあらず」という儀式的な「翁」というものをします。その後に「初番」、「二番」、「三番」、「四番」、「五番」と並べるためにジャンルに分けたのです。「神」、「男」、「女」、「狂」、「鬼」という言い方もあります。

初番ものが神様の奉祝の曲目。二番目が「修羅物」といって、今日のような、戦に関わった源平の武将が落ちる地獄、修羅地獄に落ちた人たちが、何を感じて、何を喜びとしてあの時期を生き、何を訴えようとしているかということが語られて、最後に慰められて帰っていく、という「複式夢幻能」が多いです。代表曲が『敦盛』や『八島』です。

江戸時代には無理やり、「勝修羅」、「負修羅」の二つに分けられてしまっていますが、元々、作者はそういう

分け方はしていません。善悪、勝ち負け関係なしに、戦に関ったものは必ず修羅地獄に落ちるんだというのが当時の人の考え方でした。ですが、江戸時代に祝言の時などの「修羅物」において、源氏方が「勝修羅」、平家方が「負修羅」というふうにわけてしまったんですが、これは後年の作品です。

『敦盛』はその「修羅物」の中に入っているのですが、ちょっと変わっているのは、「修羅物」というのは舞をあまり舞いません。その代わりに「カケリ」、地獄の責め苦に自分が追い立てられている、というシーンをテンポのいい囃子事を舞の代わりに入れて、後半に繋がっていくのがパターンです。今日の『敦盛』はそういう意味では何もかもが破格で、16歳、女おんな姿すがたと見紛う美しさを舞台上上げたいという目的で作られたようです。

実際、最初の頃に使っていた能面は女面であったと言われています。当時から、ユニセックスな魅力を見せたいということも、『敦盛』の中には入っていたということを知っていただければと思います。

また、能の中にはいろんな宗教に関わるものが入っているんですが、それは当時、いろんな宗教団体が庇護者になっているからです。そういう背景で作られていくことが多いのですが、「作者はするいな」と思うのは、そう言いながらも自分の言いたいことを通してしまっていて、一応、「何の宗派、お寺にスポンサーになって頂いて作ったんだな」と分かりそうなものもあるんですが、曲目の想いはそういうところから離れています。「いかにして慰められるか」それにかかって曲目ができているのをご理解いただければと思います。

## ●能の歴史

簡単な能の歴史と、私どもの片山という家が京都でどういうふうにして能を繋いできたかということをお話します。まず、能は京都でできたと思われている方が多いですが、京都で能が爆発的に流行っていききっかけを作った世阿弥・観阿弥は、醍醐寺清瀧であるとか、今熊野とかで足利将軍に見いだされ、大きなパトロンを得て中央に出てくるんですが。能は各地にありました。

特に強かったのが奈良。興福寺とかいろんな社寺のバックアップが必要で、祭礼として興行をする権利というのがあったので、神社仏閣を背景にする場合が多くあります。なにせそこには舞殿とかあったりして、す

ぐにやれる環境があるわけです。他は滋賀とか、各地にあります。つまり、今の民俗芸能があちこちにあるのとなんら変わらないと思います。

そこに鬼の能、物真似を主体とする大和系統の能、その当時は「猿楽さるがく」あるいは「田楽でんがく」と言っていたわけですが、それに、音楽系統に強い近江の猿楽などの良さを加え「複式夢幻能」というスタイルを作って、能が現在に至ります。

現在に至るまで、能は2千曲ぐらい作られては消えていました。現在まで残っているのは大体215曲なのですが、今もまだ作られ続けています。現実生き抜いている芸能だと言うことを知っていただけたらと思います。

## ●能面

一番見てわかる特徴は、能面という独特の仮面を着用して演じる芝居だということです。元々、伝統芸能には、ヨーロッパなどでもそうですが、仮面をつけて、何かに憑依されて、何かが憑依して舞い出すというのが出自のものは多いです。面をつけると、やはり不自由です。例えばこういう狭い所でしたら、演者は舞台から落ちるのではないかなと半分思いながら、やる人が多いです。めったに落ちないんですが…。そういう、想いを届けると言いながら、自分の想いを相手に向けているかを含めて、結構、制約が多いです。その代わり、仮面の面白さというのは、「何かの顔にすぐ替える」だけと思われる方が多いのですが、顔を隠すと全然違うキャラクターが飛び出します。

往々にして能面の場合はコケティッシュに見えますね。そして、顔を隠すと自分と全然違う人格のようなものが出てくるという発見が、どこかの時点で能面を作る人も気付いていると思います。古い時代の女面ですと、わりとリアルな顔をしている能面があります。現実いらっしやる女性の顔とか。男面は今でもそれが多いんですけど、女面は必要のあるところはデフォルメして、必要のないところの線を削っていくことで、舞台上でいろんな人格が生み出てくることを目指しているような気がします。それが能面というものだと思っていただければと思います。

後年に出来てきたジャンルは、次々にメイクに移っていくことを、みなさん目の当たりになさっていると思いますが、今でも面を大切にしているのは能楽師かなと思います。

他の国の仮面と一番違うのは、サイズが小さいこと。顎の部分が役者本来の肉体が一部分露出しているということが一つの特徴かなと。雅楽面や伎楽面と比べるとはっきりわかります。

こちらは自分の持って生まれたパーソナリティとの出会いの中で作り上げる。ひいてはお客様も入っていただいて、人格を作っていくということに腐心しています。一つ目の能面の説明はこういったところです。

### ●囃子の音楽構造

二つ目は「囃子」の音楽構造です。「笛」<sup>こつぷみ</sup>、「小鼓」<sup>おこつぷみ</sup>、「太鼓」。これは音楽と言い切ってよいのかな、ということがあります。実は、声だと思っていただきたい。芝居にかかってくる魂の叫びみたいなものを地謡、シテ、ワキ、皆で作りに出して、「想いの形」を出していくのが能という芝居です。ですから、笛の構造にしてもそうです。

能管というのは大体、雅楽の楽器を元にしてできているのは間違いなくと思います。雅楽の楽器との違いは、能管にはもう一つ中に筒がしまっています。これはターボエンジンのようなもので、息を強く吹き込むと圧縮された空気がぎゅっと締まってその瞬間に「ヒシギ」というとんでもなく高く強い音を出す。その代わりに音を犠牲にしています。ドレミファソラシドというのは出ない。

能管は、1管ごとに音が違うので、「連管」といって何人かが合奏するというのを、たまに笛の会でやっていますが、とても居心地の悪い思いをする。「オハイヒョーイーチャーリウヒー」というのがあれば、「オハイヒョーイーチャーリウヒー」(高い感じ)のような人もいたり。でもそれがある意味、非常に高い音から、アルトサクソで聞こえるような、人間の声に近い低い音が出てきた時に、「言葉に聞こえてくる」ということが捨てがたかったのかなと思います。

### ●鼓

鼓という楽器も掛け声をかけます。そして音をわざと低くしたり外したりすることがある。「大皮(大鼓)」<sup>おおかわ</sup>は世界一、痛い楽器だと思います。モロッコかどこかの方々とユネスコの登録の時に一緒になったのですが「どうやって打つのか、バチか何かは無いのか」のようなことを言っているのですが「ないない」と答えると、でも「打ってみたい」ということで、打

たせたくです。そうしたら「アー！」と痛がって、「Most なんとか…」と言っていたので多分「世界で一番痛い楽器」と言っていたんじゃないかと思えます。(笑)

そして、特徴のある持ち方をします。能の舞台には「本舞台」という、縦の板が張ってあるところがあります。その後ろに「横板」があり、その境目がありますが、そこから楽器だけ本舞台の中に入れる。これがこだわりです。楽器だけ半分、役者と一緒に入っているというその位置は、まさに「囃子方」、「囃す」という事に関わってきます。

かなり高度な音楽構成、技術を持っているのですが、囃子というのは同じ楽器を扱う長唄と比べて私は音楽ではないと思うんです。自信と、ある自負を持って、やっぱりみんな「純粋な音楽ではない」と言うのです。音楽ではない、役者、そして声なんです。時として、アンサンブルをわざと外して「どうなっているんや!？」とか「がんばれよ!」とか、慰めたりとか、いろんな声に聞こえる。

太鼓も含めて全部が必ず揃うとは限りません。指揮者もいません。謡を根にして、みんなでリズムを作っている。その一つずつが声なので、時としては、異を唱える人も出てきます。そういう不思議な感じですよ。

「太鼓」は、これはとっておきの、シテが神様の時だけに打ち込む、そういう楽器が太鼓です。太鼓は能が「神事芸能」であることとして大事で、昔は、太鼓の胴だけが金覆輪<sup>きんぷくりん</sup>だったと言われています。これは、雨を降らせる「農耕儀礼」の中では、太鼓は雷に直結する楽器ということで置かれていた節があって、それだけ大事にされていた。大事にするからこそクライマックスのシーンにのみしか打たないということがあります。

### ●謡

三つ目の特徴は「謡」<sup>うたい</sup>です。これから実はみなさんに体験してもらいたいと思っているのですが、普段、家であまりこういう、かなりたてるような歌を歌われることはないと思うのですが、歌というより言葉であり、語りです。

地謡は8人いますが、同じ声の高さの人が並んでいるわけではないのです。1つのテーマに対して1人が言っているのではなくて、複数人の声がそう言っているんだ、という説得力を地謡が作ってきたために、声の

違ういろんな人を集めて、方向性を合わせていく。そういう謡というものが持っている独特の特徴を活かしつつ作っていく、というのが能の全体としての特徴とされていていただけると幸いです。

## ●観世流 片山家の歴史



最後に、片山家は、元々は丹波の出身だと言われています。現在、江戸時代に一番新しくできたと言われている喜多流も含めて、「<sup>かんげ</sup>勸世」、「<sup>ほうしゅう</sup>宝生」、「<sup>こんごう</sup>金剛」、「<sup>こんぼる</sup>金春」、「<sup>きよ</sup>喜多」の5流あります。ところが実は丹波には「矢田座」というのもあったり、いろんなところに、政府公認の座、幕府公認の座という以外で能をやっている団体がいくつもあったんです。それが公の団体になっていないというだけです。

片山家は丹波の方の出身なんですけど、京都に出てきたのが元禄のちょっと前ぐらいで、桃菌小学校（現西陣中央小学校）の中に今も勸世屋敷跡があり、稲荷、「観世井」というのがあります。そこの御守りをしていただいているのが、実名を出して恐縮ですが、鶴屋吉信さんで、そこに「京観世」というお菓子があります。観世井に湧いた波紋を写した「観世水」という意匠を私たちは扇の柄にしているのですが、その意匠をお菓子に使っていただいたりもしています。

そこが家で、その支配人みたいなものをしながら、役者をしていたのが片山家初代です。二代目は江戸に上がりました。二代目が一番長生きしていろんなことも残したのですが、200番くらいある、その当時の曲目の演出メモを作りました。それがその後の人生で意外なところで役に立つことになります。

観世宗家の十五代、<sup>かんげもとあきら</sup>観世元章という方が国学に目覚めた方で、日本の言葉だけではなく漢語で並べられたような能のセリフ、文章を全部和風に改める、「明和の

改正」というのですが、200番全部を変えてしまったんですね。これは相当な混乱が起こったようです。今まで自分たちがそらんじていた言葉とかセリフが全部変わってしまったのですから、大変な事だったのでしょう。よほど不評だったのか、その方が亡くなって2週間で元に戻ってしまいました。

その「明和の改正」に関わって片山家の先祖が残っていた演出メモというのが、その後役に立って、もう一回戻すという時に使われたと言われています。

その時分から、宗家が江戸に行ってから、関西で重きをなすことができたと言われています。後年、ずっと代が下りまして私で10人目なんですけど、六代の時に江戸時代の幕末、蛤御門の変で私たちの舞台も焼失して、いろんなものが焼けだされてしまいました。

それから京都の文化シーンというのは、能も含めて、一旦ぼしょってしまったと言っているくらい、完膚なきまでになってしまいます。その直前ぐらいが、江戸の残り香の、一番の華で、うちの家では、自分のところだけに許されるような演目や特殊演出もいろいろあったのですが、その当時の記録の大半を失ってしまいました。

その後何年かして、明治の御世を見て、明治15、16年までは全然ダメでしたが、だんだん復興していきます。明治天皇の御妃（昭憲皇太后）のお声が掛かりやなんやかんやで宮中に能楽殿ができるようになって、能楽の復興が始まります。それまではずいぶん、しんどかったようですが、ようやく復興した。

その当時に、うちは「京舞」の井上流と親類になりました。以来、百何十年、井上八千代さんのお家と代を経ながら同じ屋根の下で暮らしてきました。今の五世家元井上八千代は私の姉です。8歳ぐらい離れているので、姉の娘と3人で歩いていますと私が姉の娘の安寿子と兄妹と間違われまして、姉のほうか母だと思われていました。もう故人になられましたが、月桂冠の前の大倉さんは「こないだお宅のお母さんとな…」とよく言われ、私も訂正しませんでしたら、後から姉に怒られました。「大倉さん、私の弟でございます」と。

そういう、異なるジャンルを抱えながら、ずっと片山家をつないできました。井上流の特徴のなかにも能の特徴が入っているし、つかず離れずお互いの役目を守りながら、家をずっと守ってきています。

祇園のはずれ、新門前通というところに私どもの舞台があります。今では、個人で持っているには限界があ

るといふことで、永年保存するために法人に変わりましたが、舞台をそのまま活用して保存しています。

そこでは今でも、能の稽古が始まったと思ったら、舞妓さんの練習が始まったりします。以前には、昨日の晩まで一緒に飲んでいた芸妓さんが翌朝早くから怒られている声を聞いて、びっくりして起きたりすることもありました。

そういう特殊な環境に育ちながらも、芸事の位置、近くに居れば居るほど「舞」と「能」の違いはなんなのかな、そういうことを思います。能は京舞と非常に近いのですが、絶対に違うジャンルです。舞が能の全部ではありません。舞は能の核心部分になるのですが、舞踊とは違う、ということをやなんとなしに掴めたのも一緒に居るからこそかなと、そういうことを思います。

ただ、男でも女でも結局は変わらない。役者を目指したり、舞踊家を目指したり、稽古が始まると性別、年齢関係なく怒られるということです。それをそれぞれが目の当たりにできたのは良かったかなと思います。

#### ●演目『高砂』について

『高砂』の謡というのは祝言の要素が一番、たくさん集まっています。祝言の言葉を探そうと思ったら『高砂』という曲目を探し出したらいよいよというくらい。なぜ、一番祝言になっているかという、松が変わらぬ色で千年以上の命を持つということと、和歌が関わってきます。和歌の世界の中で、室町時代にトピックスだったのが「高砂 <sup>すみのえ</sup>住吉の松も相生のように覚え」という一文で、ここから能の『高砂』という曲目ができています。

『高砂』は、おおらかな歌いぶりの『万葉集』が高砂の松、新しい歌い方、技巧的な歌い方の『古今和歌集』が住の江の松、そういう技術とおおらかさが相まってこれからも先も歌の世界がどんどん繋がって行くんだと願いを込めた能です。命、行く末を長く持っていける、ここが一番、祝言の元となっている部分です。

そして、今日、謡うところは、結婚式などでよく謡われている「高砂やこの浦船に帆を上げて」というところ。皆さん、騙されたと思って1行ずつ、紙を持って紙に向かってではなくて、頭の体操で1行ずつ覚えて謡ってみてくれませんか？



高砂や この浦舟に 帆を上げて  
この浦舟に帆を上げて  
月もろともに <sup>いでしお</sup>出汐の  
波の淡路の島影や 遠く鳴尾の沖過ぎて  
はや住吉に <sup>すみのえ</sup>着きにけり  
はや住吉に 着きにけり

やってみたら、意外とできるものです。頭はいらないのです。言葉の意味もいらないのです。祝言というのは気持ちです。後から言葉に出会う方が、もっとニュアンスが膨らみます。

これは子どもに対する教え方なんです。うちの息子は漢字とかがまだわからなかった時、1行ずつ復唱するこの教え方をすると一番、正確に伝わります。これが稽古の仕方というもので、その代わり、テキストを与えないんです。「3回謡ったらセリフを覚えろ」というのをルールとした。「そんなの僕でもできひん」と思ったのですが、そういう教え方があるもので、子どもにやってみたんです。人間というのは、やったらなんとかなるもんですね。「意味は？」と聞かれたら息子は「そんなん知らん」と言っていましたけど。(笑)

なんとなく実際に舞台上で演能していく中で、他の人たちのニュアンスを汲み取るいろんなセンサーがあります。子どもはサラですから忘れる必要がない。

そういう感じで乾いた紙に水を吸わせるように教えていくというのが、もともとの謡の教え方です。だから、本をいかに離すか。そうすると、今のようにできます。また1回どこかでやってみたいと思いますが、上々の成果ということで締めくくらせていただきます。ありがとうございます。

#### ●能装束、能面の解説

能に使う一番豪華な衣装は、刺繍物の「縫箔」<sup>ほうはく</sup>、あるいは「唐織」<sup>からおり</sup>。錦の女衣装を総称して唐織、<sup>おんないしやう</sup>「厚板」<sup>あついた</sup>と私たちは申しておりますが、今日、持ってきているのは縫箔です。

私のように非専門家が西陣に近いところで、織物のことを言うのもなんなんですが、絹枠のような機械に、染めてある縦糸を張って、今ですと「ジャカード」ですが、昔ですと「空引機」<sup>そらひきばた</sup>。よくあんな西陣の暗い所で、天窓だけを頼り紋紙に合わせて糸をひっぱりながら1本ずつ、とても無理やなど、いつも思うのですが。

今はジャカードになったと言えど、手作業が中心ですから大変なことと思いますが、1本ずつ綺麗な模様が出てきます。ジャカードと空引の違いは、最近までは物の大きさに反映していました。どうしても模様が大きければ大きいほど代がかかってくるというのもあったのか、ジャガードは割に細かい物の返しが多いんですが、空引の時代、江戸の名品は大きなうねりの模様が、ちょっとずつ調整されつつ織られているというのが特徴かなと思います。

今でも、良い装束というのは、唐織の場合はルーペで見ると糸が真っ直ぐ走り続けているというのがすごいなと思うことがあります。今日は『敦盛』の衣装ということで縫箔を一般の方に着付けさせていただきながら説明します。

### ●能装束の種類

まず能衣装を着る前に、本来だと、綿入りの「胴着」というものを着ます。膝丈ぐらいの物なんですが、これは裾がさばきやすいように膝のところで割れていて、袖も、普通の袖だといろんな所作をする時に邪魔になるので切っています。

袴と上着を自分の体の特徴よりもちょっとファジーに着れるように調整します。ちゃんと腰に合わせて着ると、「大口（袴）」<sup>ちゆうけん</sup>、「長絹」の案分が変わります。ある人は極端に足が短くなりますし、ある人は極端に長い袴を履かないといけないことになるので、調節が効くようにしています。

今日は胴着を飛ばしますが、その上に「襟」というものがあります。皆さんの着物ですと襦袢に襟が1つずつ縫ってあると思いますが、それが、いろんな色に差替えができるようになっていきます。基本は2枚の襟をつけるのが大前提なんですが、着付けの都合で1枚にすることがあります。



あるいは「中入り」といって、早変わりをしないといけない時には、台のついていない襟だけのものを挟んで隠しておいて、それを抜いたりする場合があります。

この縫箔は「半着付」といって、袴を履く時専用にも模様も節約してあります。これが大名道具だと全然見てももらえないところまでびっしりと刺繍が施されているものもあります。それは家にもたくさんありますが、使い続けると痛んでくるので、絶対に使わないところの縫いを外して、天地を替えます。これは私どものところだけではなく、京都国立博物館に入っているようなものでも、天地替えで仕立替えに使っているものもあります。

今のこの仕立ての形になってきたのは結構近代で、江戸中期ぐらいまでの装束の形、仕立ての形というのは今と違います。「砧型(きぬたがた)」という、ウエストのところが砧のように少し細くして着付けやすくしてあったり、もっと古い時代ですと「小袖」と言って袖幅が短く、そのかわり袖丈が長い物もあります。ただ、それは現在では用途が無いので、今では古い装束も仕立てを替えて現代の形に直して使っているのが常です。





「薄物」の「ほら絹」というか、「三本絹」と能の方では言うのですが、3本越しの絹で作ったもの、あるいは珍しいのですが「紗」で作ったもの、平家の公達の衣装がだいたい薄物になります。季節は関係ありません。緞子、あるいは錦襦にしきじゆで出来たもので、厚物の金箔中心に模様ができていた物を「合せ法被」といい、それは源氏方の武将、あるいは貴人の役の時に着るということになっています。これは「露」という飾り紐がつかません。

「長絹ちやうけん」という物には露をつけるのですが、法被の時にはつけないという約束事がある、このイカの耳みみたいな布がついていなくて、分かれているのが長絹です。差し渡しがついているのが法被という違いがあります。



「このイカの耳みみたいな布がついていないのが長絹」

「腰帯」、歌舞伎ですとこれを松竹さんは「石帯」と呼びます。腰帯、腰の飾り紐です。結びながら形を整えていきます。これが上手い付け手になりますと左右均等にきれいにつきます。「鬘帯かつらおび」、腰帯は刺繍でできています。たまに織の物もあります。



そういうと能の装束の中で一番使われていることが少ないのは、「染」です。友禅は限られた部分でしか私達はお付き合いが無いのですが、狂言のほうは染が中心になるので、そちらはお付き合いが多いです。

なぜ友禅が少ないかという、友禅の持っている立体感が、織物に立体的にアピールできないということがひとつ。友禅の上手な方の仕事は、能ではまず無いです。上手な友禅になると輪郭の絵がはっきりしすぎるので、ちょっと、逆に能の世界的には、さめてしますぎる場合があります。むしろ古い「いい装束やな」という装束には友禅が若干あります。漆箱のような友禅の技術が入っているものも、あるにはあって、腰巻にもあるのですが、現代の友禅の作家さんにそれをお見せした時に「なんと下手な友禅やな」と言われたことがあります。それぐらい大雑把なところでしかお付き合いがないというのが正直なところですよ。

太刀を結びまして…、ここに、ところどころ糸が残っているのわかりますでしょうか。客席からはわかりませんが、飾りの露という紐をつけて、長絹に流用できるようになっています。そして脇の布を外すと長絹になります。



ちなみに日本で、現存していて、使われている装束で一番古いものは観世宗家が持っています。足利義正公持領と言われている、とんぼの一重法被がありまして、それはいわゆるこの形です。身ごろのところが増やしてあってこれよりもう少し広幅ですが、それは「紗」で、「竹屋町刺繍」が施されています。

「能面」が出てきました。これは「十六」という名前の能面で、敦盛の専用面として江戸以降にできている面おもてです。「女性と見まがえるよう」ということで「小面」を流用している時代もあったのですが、結局そうもい

かないだろうということで戦場での若い男を表現するためにつくられています。もっと幼い顔の十六とか敦盛もあります。



裏に枕がついています。それぞれの顔に合わせて角度調節をして、体の線と顔の形とを合わせます。能面は陰によって表情が出てきますが、能面だけでは表情は出ないんです。役者の動きとか表現が相まって初めて生きてくるので、いくら良い面でも、空で見せていると値打ちが半分以下になってしまいます。やはり着けて使う物だと思います。その点、水を差した時のお茶の道具なんかと同じように、使われないと勿体ないなと思います。

博物館に入ってしまうと、私達何が悲しいかという、使えなくなるのが一番悲しいことです。よく能面のことをご存じの方は、「照らす、曇らすと表情が変わるのね」と言われますが、実は、影が変わるだけで表情はあまり変わりません。なるほど、ちょっとは雰囲気が変わるんですが、泣いたり笑ったり、役者の生命に近いところの表現で、控えめにやる。それにつれて、表情の変化は、実はお客さんが想像しておられるのです。



ここで「烏帽子」が出てきました。「梨子打烏帽子」と言いますが、これを軍隊の時には左、右へ折ります。左折り、右折りと変えてしまうのはうちの流儀だけら

しいのですが、『烏帽子折』という牛若丸元服の時の演目があり、「源氏方の武士は左折、平家は右」という言葉が出てきます。『烏帽子折』、自分が元服をする時に烏帽子屋さんを訪ねて行って、「左折の何番で頼む」と言うと、「平家全盛の御世で左折なんて注文したら危ないよ」と言われるんですが、あえて「左折」という言葉があるので、それに合せるように左に折る。今日の烏帽子は右折りです。

「鬘かづ」、これは馬の尻尾の毛でできており、「馬尾毛（ばす）」と言って、上に独特な穴があいています。これは上に冠を乗せたり烏帽子をつけたりする時、専用の鬘で、巻かずにそのまま放し髪にして使うことになっています。稀に天女の時なんかにもつけていますが、昔は普通の鬘をつけた上に「黒垂くろたれ」をつけていたらしいのですが、ただでさえ首の骨がどうかなっていくのに、と思うような時があるので今は省いて、鬘なら鬘だけ、黒垂なら黒垂だけというふうに使っていますが、昔は使い分けがあったそうです。



装束というのは3人1組で付けていって、本人もここで付けていくことを習います。袖から手を入れて、中から押さえて、のように、これは着物を着慣れるにしたがって同じような事があると思うのですが。それによって自分が動きやすいような、足のさばき方とか、袖のひばられようとかを調整していきます。

よく歌舞伎の役者さんが「何十キロの重さ」とか言われますが、あれを見ていて「そんな重いのかな？」と思って見るんですけども。能の装束というのは、フルセットで一番重いものをつけても10キロになることはありません。ただ、恐らくしんどいのは、目一杯締められて、袖が動かない、首が回りにくいという状況で、それぐらいの重さを感じるようになってくると。

汗をかくときの夏場の苦しさは本当に例えようがないです。よくわからない頃に、面紐とか鬘の紐とかを締

めすぎると、何か緑色の液体が流れてくるのです。そのうち星も光りだして「これはあかん」ということになります。(笑) もう今はさすがに無いのですが。



「修羅扇しゅらせん」という波に夕日の模様、これが能の五流ほとんどの決まりになっています。「沈みゆく太陽」が1つのコンセプトになっている。本来修羅は全部これでいいはずなんですけど、先ほど申し上げた理由から「勝修羅」というのがあり、「松に朝日」というとってつけたような反対の柄があり、それを勝修羅として使っています。

ほとんど見えませんが、扇というのは裏表が同じ模様でも、裏表が決まっています。「骨がツルツとした方が、持った時に表に来るように渡せ」とずいぶん先輩に怒られました。

扇を開いて、左足を「外輪」と言って外向きに、がに股に出します。右足はまっすぐ出します。扇を時計の10時に出し、この時顔は正面を向いたままです。能面の時は、体で線を覚えておかないと、顔が違うところを向いてしまいます。扇を上下に動かし、「あっぱれ、あっぱれ」という格好をする、これが「ゆうけん」です。



能面をつけて、ハッと動くとなんともコケティッシュです。本人は大真面目にやっておられると思います。全然違うものが、得てしてそうになってしまう。ものすごく表情がデフォルメされている。それが能面の「まず顔を隠す」というのはそういうところです。

こういう姿をすると、「<sup>ひと</sup>重身」といって、柔道の「左自然体」、「右自然体」とあるのと同じで、もともとは、戦場で矢が当たるのを避けながら、次に攻撃に移りやすい。それが能にも残っていて、「右一重身」、「左一重身」とかいうことで前にいくほうの手を少し出す、という自然な動きがあります。

「<sup>運び</sup>運び」といって、舞台上であまり違和感ない動きで体を運んでいくことができるように「運び」というものがあります。よく「摺り足」と言われますが「摺る」ことが本義ではないので、私達は「摺り足」とは言いません。足の運びと申します。体重を移動しながら、体の線が崩れないように、自分のいるところから足を前に出して、膝を伸ばして半歩進む。それをつないで、体の重心を必ず真ん中に両足の間にもってくるように動く。

「能楽へのいざない」ということでどこまでいざなえているかわかりませんが、みなさん思っているよりも、能楽堂は敷居を低くしていますので、是非、また足を運んでいただきたいと思います。ただ、中には確かに難しい曲目もありますので、初めてご覧になる時には「鬼の能」や今日の「修羅物」から見ていただいたら一番入りやすいかな、シンパシーを感じやすいようなストーリーが多いかなと思いますので、是非、遊びに来ていただきたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。